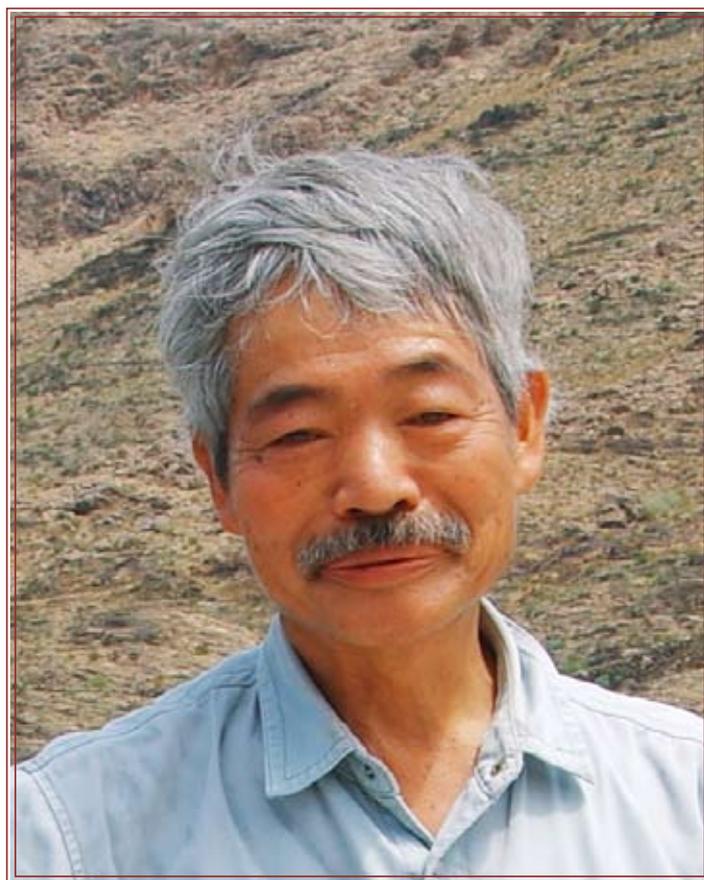


【追悼特集】



中村 哲先生を偲んで



中村 哲先生のご略歴

- 1973(昭和48)年 九州大学医学部卒業
- 1973(昭和48)年 国立肥前療養所勤務 (昭和48年5月～昭和50年3月)
- 1975(昭和50)年 大牟田労災病院勤務 (昭和50年4月～昭和54年6月)
- 1979(昭和54)年 馬場病院勤務 (昭和54年6月～昭和57年12月)
- 1984(昭和59)年 英国リバプール熱帯医学校 熱帯医学専門医(DTM&H)
(1983年9月～1984年4月)(昭和58年9月～昭和59年4月)
- 1984(昭和59)年 ペシャワール・ミッション病院ハンセン氏病棟医長(パキスタン・ペシャワール) (昭和59年5月～平成6年10月)
ペシャワール会現地代表(昭和59年5月～現在に至る)
- 1986(昭和61)年 JAMS ジャパン・アフガン・メディカルサービス設立・顧問(パキスタン・ペシャワール) (昭和61年10月～平成10年4月)
- 1994(平成6)年 PLS ペシャワール・レプロシー・サービス病院設立・院長(パキスタン・ペシャワール) (平成6年10月～平成10年3月)
- 1998(平成10)年 PMS ペシャワール会医療サービス病院 院長・総院長 (JAMSとPLSを統合) (平成10年4月～平成21年7月)
- 2009(平成21)年 活動拠点をアフガニスタンに移す(平成21年7月)
- 2010(平成22)年 事業体名称変更
PMS ピース・ジャパン・メディカルサービス(平和医療団・日本) 総院長 (平成22年1月～)
- 2014(平成26)年 九州大学高等研究院特別主幹教授 就任

学術賞・受章

- 1996(平成8)年 厚生大臣賞
- 2003(平成15)年 マグサイサイ賞「平和と国際理解部門」
- 2014(平成26)年 第8回 KYOTO地球環境の殿堂入り
- 2017(平成29)年 アフガニスタン国ガニ大統領より「ガジ・ミール・マスジット・カーン勲章」授与
- 2018(平成30)年 土木学会技術賞受賞
- 2019(令和元)年 ウラマー会議ジャララバード(伝統的な宗教委員会)より表彰
アフガニスタン国ガニ大統領より「アフガニスタン・イスラム共和国市民証」授与

活動概要

1946年福岡県生まれ。九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、1984年パキスタン北西辺境州（現：カイバル・パクトウンクワ州）の州都ペシャワールに赴任。以来30年にわたりハンセン病をはじめ貧困層の診療に携わる。1986年にアフガン難民診療チームを発足（のちのJAMS＝ジャパン・アフガン・メディカル・サービス）し、アフガニスタン国内へ活動を広げ、1991年から医療過疎地でハンセン病多発地でもある東部山岳地帯に3ヵ所の診療所を開設。アフガニスタン、パキスタン両国に跨り医療活動をする。1996年、パキスタン北西辺境州山岳地2ヵ所に診療所を開設。更に診療所を拠点に巡回診療も行う。

1998年、恒久的基地病院としてペシャワールにPMS（Peshawar-kai Japan Medical Services のちに、ピース・ジャパン・メディカルサービスと名称変更）を建設。年間診療数約15～20万人。（アフガニスタン、パキスタン総数）

2000年、アフガニスタンで大干ばつが顕在化。緊急対策として水源確保事業を実践し、2008年までに飲料用井戸1600本掘削、カレーズ＝地下水路38ヵ所復旧、直径約5mの灌漑用井戸を13基掘削した。2001年3月、干ばつ被災と戦乱により国内避難民が集中した首都カーブルに診療所を5ヵ所開設した。同年10月「いのちの基金計画」を立ち上げ、同地で厳冬のなか餓死線上にあった人々に越冬可能な量の食糧配給を行う。2002年2月、アフガニスタン東部で「緑の大地計画」を起こし試験農場約1ヘクタールを設け乾燥に強い品種の作付けや土壌の改良によって生産量を上げることを目的とした農業事業を始めた。

干ばつが深刻化する2003年3月、総合的農村復興を目指し、灌漑用水路掘削を開始。2010年3月、13ヵ所の貯水池＝調整池を付設する全長約25km（現在27km）のマルワリード用水路が開通した。

また、用水路最終地点のガンベリ沙漠に約230ヘクタールをPMS試験農場とし開墾中。米、小麦、野菜、果物等の試験栽培を始めた。畜産も可能となりつつある。

マルワリード用水路によって耕作農地が広がるにつれ推定15万人以上の難民が帰還した。難民の帰還に伴いアフガン農村社会・地域共同体の要であるモスクとマドラサ（伝統的な寺小屋式教育機関）を建設。2010年2月完工し地域住民へ譲渡した。

現在も進行中の干ばつ。洪水と渇水が繰り返し発生し、各地の既存用水路の取水口は壊滅状態で灌漑不可能となっているため、PMSは堰・取水門の新設、改修に着手し、2019年に9ヵ所目の堰を完成させ流域の農地が復旧して来た。これが成ると既に完工している地域を合せ、約16,000ヘクタールの安定灌漑を可能にし、約65万人の生活を護る。

マルワリード用水路建設、既存用水路取水設備の新設、改修によりナンガラハル州の穀倉地を救い、約16,500ヘクタールの安定灌漑、約65万人の生活を保障し多くの難民が帰還・帰農しつつある。

[年間診療数] 約50,000人

著書・共著

『ペシャワールにて』『ダラエ・ヌールへの道』『医は国境を越えて』『医者井戸を掘る』『辺境で診る、辺境から見る』『医者用水路を拓く』（以上石風社）『アフガニスタンで考える・国際貢献と憲法九条』（岩波書店）『医者よ、信念はいらぬ まず命を救え』（羊土舎）『アフガニスタンの診療所から』（ちくま文庫）『人は愛するに足り、真心は信ずるに足りる』（岩波書店）、『天・共にあり』（NHK出版）『改訂版 アフガン・緑の大地計画』（PMS & ペシャワール会出版）など。



中村哲先生を偲んで

一般社団法人 九州大学医学部同窓会会長
富永 隆治(昭50卒)

中村哲先生がアフガニスタンの地で凶弾に倒れ亡くなられました。先生には昨年の9月にお会いし、6月の同窓会総会での特別講演をお願いし、快くお引き受けていただいたばかりでした。多くの同窓会員から先生ほどノーベル平和賞に相応しい方はいないという意見を戴き、どれほどの効果があるかわかりませんが、理事会でもノーベル平和賞獲得への具体的な方策を検討していた矢先のことでした。また、これから九州大学医学部同窓会として先生を支える為にペシワール会の活動に参加しようという機運が盛り上がったところでした。道半ばにして倒れられた先生の無念さは計り知れません。いかに無常の世とはいえ、これはひどすぎます。病む人を救うことだけを考えて、あんなにも立派な先生の命を奪うことなどあってはならぬことです。深い悲しみとともに、今回の一連の事件のその理不尽さにやり場のない憤りを感じます。

先生は昭和48年に九州大学医学部をご卒業になり30年以上にわたり、内戦と旱魃が続くアフガニスタンの地で、医療だけでなく、病気の根本原因である貧困と水不足による飢餓の問題に正面から立ち向かわれました。旱魃に対応するために1600本もの井戸を掘り、さらに幾多の困難にもめげず、不可能と言われた砂漠に全長26kmにも及ぶ用水路を通し、荒れ地を灌漑し、緑の

大地に変えられたのです。やむなく荒れ果てた農地を捨て棄民となっていた65万人もの村人が続々と故郷に帰り、元の幸せな生活を取り戻したのです。先生は確たる信念のもと、真摯に戦争の悲惨さと平和の尊さを訴え続けてこられました。人種、民族、宗教、イデオロギー、政治等々の壁を越え、ひたすら、アフガニスタンの人々の幸福を、そのあるべき形で求めてこられました。現地の人々の宗教、伝統、習慣、文化を尊重し、同じ目線で事業を進められました。大国のエゴを否定し、現地の人たちに溶け込み、自ら鍬を取り、重機を操作し、現地の技術水準にあった治水方法を導入されました。成功までの道筋はいかばかりの困難があったか計り知れません。先生はまたアフガニスタンの惨状は地球規模の温暖化の影響であることをいち早く訴えてこられました。我々は今一度、残された先生の言葉の意味を考え行動しなければなりません。

先生は我々九州大学医学部同窓生の誇りであり、医師として如何に生きるべきかを教えていただく「道しるべ」でありました。病む人、苦しむ人に対する先生の慈愛に満ちたお姿を思いながら、心からご冥福をお祈りいたします。

合 掌

(令和2年2月7日)

追悼 中村哲先生

九州大学総長

久保 千春(昭48卒)

2019年12月4日に、中村哲先生がご逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

アフガニスタンの復興のために尽力してこられた中村哲先生が亡くなりましたことは、九州大学としても大きな誇りである柱を失ってしまい、痛恨の極みであります。誠に残念でなりません。

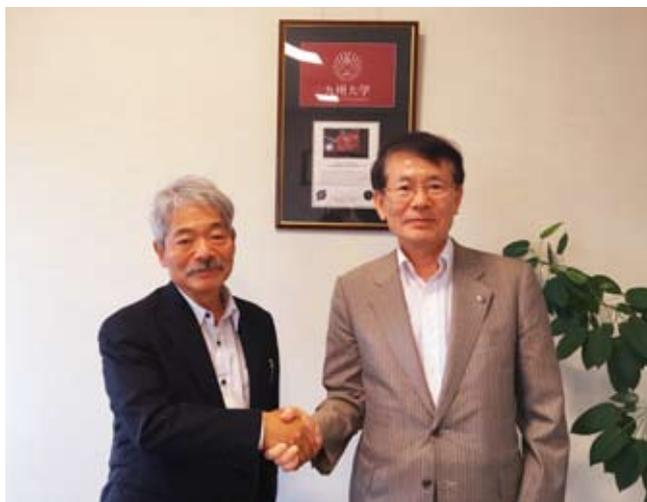
中村哲先生は1973年3月に本学医学部をご卒業され、1984年にペシャワール会現地代表となられて以来、パキスタンやアフガニスタンにて医療活動に従事してこられました。その傍ら、2000年に大干ばつに見舞われた際、用水路が必要なことを痛感され、2003年からは農村復興のための水利事業を続けてこられ、砂漠に緑が蘇りました。そしてなによりも人の和を大切にされ、現地の人々の強い信頼のもと、復興事業に取り組んでこられました。

本学においては2014年の特別主幹教授就任以来、毎年本学学生・教職員そして市民の皆様に対しこれまでの取組や貴重な経験を穏やかにそ

して力強くご講演いただきました。「飢えと渴きは薬では治せない」とも語られ、その成し遂げた事業の壮大さに強い感銘を受けました。これまでの経験を通して感じた思いを率直に、穏やかに、丁寧に語られる姿に、先生の温かで誠実な人柄や実行力を感じていました。

個人的には大学の同級生であり、学生時代に一緒に無医村でボランティア活動をした時に「愛が大事である」と言われたのを覚えています。2019年10月20日には大学のクラス会のためにアフガニスタンからわざわざ駆けつけてこられました。これが最後の別れとなりました。先生の考え方や行動は私の指針になっていました。先生のなされたことや信念は強く私たちの心に残り、そのご遺志は多くの人々に引き継がれていくことと思います。大学として、先生のご遺志を若い世代にもしっかりと伝えてまいります。

中村哲先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。





アフガニスタン救援活動中に凶弾に倒れたる 中村哲先生を悼む (連作短歌)

学校法人原学園、原看護専門学校 校長

小柳 左門(昭48卒)

かねてより私が尊敬してやまなかった、同期卒業の中村哲先生の突然の逝去に大変驚くとともに、ご葬儀に参列した折にますます哀悼の感を深く致しました。今や我が国とアフガニスタンの国民だけでなく、世界の人々が先生の死を悼んでいます。拙い短歌ですが、「学士鍋」に投稿させていただきますので、よろしく願いいたします。

アフガンの帽子をかぶり^{ほほみ}微笑みて
くつろぎいます君が写真^{うつしゑ}

元気でと^{ふたとせ}二年前に別れしが
かかる姿でまた会はむとは

日ごろより覚悟するとも凶弾に
たふれし君の無念を思ふ

(会場に流さるる映像を^み覧て)
歩みこし苦難の道を淡々と
誇ることなく友は語りつ

ひたすらに大地をうがち一步一步
君は作りき長き水路を

アフガンの人らとともに土を掘り
石動かして水路できゆく

乾きたる水路の土にひたひたと
取り入れし川の水は寄せくる

干ばつに苦しみぬきしアフガンの
乾く大地に水流れゆく

アフガンの大地は潤ひよみがへる
野に緑なす草木ひろがる

避難せし六十五万のひとびとは
ふるさとの地に戻りて来しと

三食の飯を家族とともにとる
ただそれだけが願ひなりきと

(葬儀でのごあいさつ)

四十年ともに過ごしし思ひ出を
涙ながらに君は語りき

(葬儀委員長、村上先生)

凶弾に倒れし先輩を嘆きます
君の言葉に悲しみあふる

父君の^{のこ}遺せし言葉を忘るなく
生くとふみ子の声に泣かゆも

(喪主様)

アフガンの大使は声もとぎれつつ
涙をふきて語りたまひき

アフガンの国民すべて悲しみに
うちしづみぬと告げたまひたる

一輪の白菊そなへなつかしき
君が遺影に祈りささぐる

上皇さま上皇后さまもみ言葉を
寄せたまへりと聞くぞかしこき

会場をうめてあふるる人々の
列つづきたり君を悼みて

(令和元年12月11日)



中村哲先生のことば

ペシャワール会会長

村上 優(昭49卒)

2019年12月4日PMS (Peace Japan Medical Services) 総院長、ペシャワール会現地代表の中村哲医師がジャララバードにある宿舎より用水路の現場に行く途中、何者かの凶弾に倒れて亡くなった。無念の一語である。事件を契機に、また彼の功績についても再発見されたように高い評価をいただいた。多くの著書もあり、またペシャワール会のHPを見ていただくと、用水路をはじめ現地活動を「週報」としてこまめに写真と文章で報告しているので、入会申し込みを含めて機会があればご覧をいただきたい。

1984年にパキスタン北西辺境州(現 カイバルパクトゥンクワ州)、ペシャワールでのハンセン病根絶計画に参加する目的で始まった活動は、その後36年間に医療や、水事業、そして農業の復興と姿を変え、パキスタンとアフガニスタンをまたいで命を支える活動となり、この地に根差し継続してきた。現在は16,500ヘクタール、65万人を養っている。活動のきっかけは1978年のヒンドゥクッシュ山脈最高峰のティリッチ・ミール登頂に医師として同行した折の体験による。「不思議な縁の連続は、5年後にこの北西辺境州に私を呼び戻したようである。当地への赴任は最初にヒンドゥクッシュ山脈を訪れた時の衝撃の帰結であった。同時に余りの不平等という不条理に対する復讐でもあった」(「ペシャワールにて」石風社)と記している。当時は医療における不平等への憤りからの出発であり、2000年の大干ばつを受けて水事業が始まった。この大干ばつは国際社会から無視をされて国連による制裁があり、反発したタリバンによってバー

ミヤンの石仏が爆破された。文化財破壊への批判を前に「今世界中で仏跡問題が盛んに取りざたされているが、PMSは非難の合唱に加わらない。餓死者が百万人といわれるこの地獄のような状態の中で、今石仏の議論をする暇はないと思う。暴を以て暴に報いるのは我々のやり方ではない。人類の文化とは何か。人類の文明とは何か。考える機会を与えてくれた神に感謝する。真の『人類共通の文化遺産』とは、平和・相互扶助の精神でなくて何であろう。それは我々の心の中に築かれ、子々孫々伝えられるべきものである」と現地職員に事業継続を話しかけている。そして中村先生は語る。「その数日後、バーミヤンで半身を留めた大仏を見たとき、何故かいたわしい姿が、ひとつの啓示を与えるようであった。『本当は誰が私を壊すのか』。その巖の沈黙は、よし無数の岩石塊と成り果てても、全ての人間の愚かさを一身に背負って逝き、万人に宿る仏性を呼び起こそうとする意志である。それが神々しく思えた。騒々しい人の世に超然と、確かな何ものかを指し示しているようでもあった」と。

今回、犠牲になられた中村先生がこの大仏が物語る尊さそのものに思えてならない。ペシャワール会は問田直幹(昭9卒)・高松勇雄(昭29卒)・後藤哲也会長(昭39卒)と続き九州大学医学部とは縁が深い。活動は継続的な会員の寄付で成り立ち、中村哲先生の事業と希望は継続されます。同窓会員皆さまのご支援をお願いしたい。

中村哲先生のご逝去に寄せて

九州大学大学院医学研究院
生化学分野 教授

住本 英樹(昭57卒)

中村哲先生の悲報に接したのは、12月4日の午後4時半を少し過ぎた頃、大石さん（医系総務課長補佐）からの知らせでした。11日の中央区古小鳥での中村家とペシャワール会の合同葬、年末に届いたペシャワール会報「号外」、1月25日の西南学院大学チャペルでの「ペシャワール会臨時総会」とそれに続く「中村哲医師お別れ会」、その場にいながら全てが呆然とした中で過ぎていきました。大切な人を失った時、人はただただ悲しいのだ、時を経ても、ただただ悲しいのだ、と改めて思います。

九大医学部関係者には中村哲先生と御縁の深い方が多数おられます。そのような中で甚だ僣越とは思いましたが、近年の中村哲先生と九大医学部・医学部生との交流に僅かながら関わった者として、そして中村哲先生を敬愛する後輩のひとりとして、「学士鍋」に記す意味が多少はあるかと思ひ筆をとりました。

「中村哲先生の講演会を馬出（病院地区）で開いてくれないか」という話が九大本部からきたのは、平成29年（2017年）5月末のことです。中村先生は平成26年に九州大学高等研究院の特別主幹教授に就任され、以来毎年1度九大で、高等研究院主催の講演をされていました。それまでの3回の講演会はいずれも伊都地区で行われたので、今回は馬出でどうだろうかとのこと、一も二もなく引き受けることにしました。と言いますのも、平成27年1月に医学部長／医学研究院長に就任して以来、中村哲先生に医学部で若い人たちに向けて講演して頂くのは私の夢だったからです。副研究院長の康教授（臨床検査医学）、北園教授（2内科）ともよくその話をして

いました。ただ、一時帰国された折には寸暇を惜しんで全国を回り現地報告をされている中村先生に、高等研究院での講演に加えてさらに馬出に来て頂くようお願いするのは、どう考えても憚られます。夢のままどうにもできずにいるうちに時は流れ、平成29年1月から医学部長2期目（平成30年12月まで）に入っていました。

高等研究院と医学研究院の共催による中村哲特別主幹教授講演会「アフガンに命の水を」は、平成29年（2017年）8月3日午後3時半から5時まで、医学部百年講堂大ホールで行われました。無事開催できたのは、医系学部等事務部の吉田部長を筆頭に、有田次長、医系総務課の大石補佐、永末係長、木山係長、麻川主任、島田さん、医系財務課の石丸課長、安東補佐をはじめとする職員の皆様のチームワークの賜物でした。当日は、学生、若手の医師・医療従事者もたくさん集まりました。巖佐教授（高等研究院長）の開会挨拶の後、中村哲先生は御自身の活動についてたっぷり1時間話されました（写真1）。御存知のように先生は、1984年以来ペシャワールを出発点に、パキスタンとアフガニスタン



写真1

で貧困層の診療や山岳無医地区での診療・病院開設に携わり、さらに2000年からは大旱魃が続くアフガニスタンで、「まず生きていなければ治療もできない」と、水源確保のための井戸掘削と灌漑用水路の建設を行ってこられました。「旱魃の犠牲者の多くが幼児であった。「餓死」とは空腹で死ぬのではない。食べ物不足で栄養失調になり、抵抗力が落ちる。そこに汚水を口にして下痢症などの腸管感染症にかかり、簡単に落命するのである。」(中村哲『天、ともに在り』84頁)。我慢できずに川床の泥水を啜ろうとする幼な子のスライドを見て、惻隱の情を抱かなかった人はいないと思います。そして、大寫しの定点観測のスライドの中に、砂漠が緑に一変した様子を目の当たりにすると、先生の本やテレビ報道等で見知ってはいても、改めて深い感動を禁じ得ません。しかも、その話を中村先生ご自身から聞くわけです。講演後、医学生、若手の医師・医療従事者から多くの質問がでました(写真2/3)。それぞれに対してユーモアを交



写真2



写真3



写真4

えながら丁寧に応える中村先生が印象的でした(写真4)。渡邊君(医学科6年)からの質問は「自分も進路を決める時期だが、中村先生はどの段階で今の活動をしようと思われたのか? 学生の時から考えておられたのか?」というものでした。先生は、卒業後の進路はあまり深く考えずに決めた、と言われます。ペシャワールに赴任したのは、当地の昆虫に対する興味と日本と違った環境で患者を看たいという気持ちの2つが大きな動機であったが、その後も、その場の目の前の問題に対して「いま自分にできることは何か」を考えそれを実行してきた結果に過ぎない、と。「アフガニスタンやパキスタンに縁もゆかりもなかった自分が、現場に吸い寄せられるように近づいていったのは、決して単なる偶然ではなかった。しかし、よく誤解されるように、強固な信念や高邁な思想があったわけではない。」(『天、ともに在り』26頁)。その時その時の出会いや縁に対して誠実に応えてきた、ということでありましょう。閉会挨拶の折に、余りにささやかではありましたが「九大医学部のメダル」を差し上げたところ、笑顔で受け取って下さいました(写真5:中村哲先生と筆者)。

講演会(高等研究院との共催)の後15分ほど休憩して、今度は医学研究院の単独主催による「中村哲先生との懇談会」を行いました。これは、中村先生と九大の若い世代が直接話す機会を作れば、との思いから企画したものです。おそるおそるペシャワール会を通じて先生にお願いしたところ、若い人の役に立つならと快諾して



写真5

下さいました。百年講堂の交流ホール（玄関から入ってすぐのスペース）に展示していた「ペシャワール会の活動の写真パネル」に中村先生にも来て頂き、その前でひとりひとりと直接遣り取りをする、という形を採りました。講演会の時には質問する勇気が出なかった人でも聞きやすいのではないかと考えた訳です。前もってメール等でキャンパス内に連絡していたこともあり、講演会の後も多くの人が残ってくれていました。最初は皆さん少し遠慮気味だったのですが、だんだんと打ち解けて、とても熱心な討論が続きます（写真6）。30分たってもなか



写真6

なか終わりそうにありません。気が付けば、中村先生は、少しの休憩を挟んでずっと立ちっぱなしということになってしまっていました。不明を恥じて急遽、中村先生に椅子に座って頂き、皆さんには先生を囲んで座ってもらって、そこで質問を受けるという形にして、さらに続けることにしました（写真7）。ここでも話は尽きず、結局、「中村哲先生との懇談会」は6時半頃まで続きました（写真8：最後まで残って下さった皆さんと中村先生との集合写真）。この時の中村先生との遣り取りが、その後の勉強や仕事の支えになっている、という方が何人もおられるよ



写真7



写真8

うです。

懇談会の後は、お礼を兼ねて医学部執行部で夕食にお招きしました。北園教授（2内科）のセットアップです。中村先生は大変お疲れだったはずですが、今回九大の若い人達と近くで話せたことを、とても喜んで下さっている御様子に少しほっとしました。また、ノンアルコールビールを飲みながら、「用水路建設現場に歩いて行く時に、昆虫観察をするのが楽しみです。緑が蘇り家畜も飼えるようになると、どこからともなくスカラベも戻ってきました（スカラベ：ファール昆虫記に出てくる甲虫、別名フンコロガシ）」と嬉しそうに話されたのが、昨日のことのように思い出されます。先生は「十歳の頃、昆虫のとりこになって現在に至る」（『天、ともに在り』16頁）のですが、アフガニスタンとパキスタンに跨るヒンズークッシュ山脈を最初に訪れた時の「蝶」の話もして下さいました。ちなみに、元昆虫少年のふたり伊藤教授（医化学）と私が、身を乗り出して聞いていたのは言うまでもありません。夕食を終えて会場から広い道に出る道すがら、中村先生はすかさず煙草を口にされました。そう言えば、指に煙草を挟んでい

る写真やテレビ映像を見た記憶があります。我慢されていたかと思うと、少し申し訳なく少し切ないような気持ちになりました。

翌平成30年（2018年）は、8月7日午後1時半より、医学研究院主催で「中村哲先生と九大医学部学生の講演会」を医学部百年講堂大ホールで開きました。ペシャワール会には私も何度か電話し、過密スケジュールを知りつつ、「次世代に期待する」という中村先生の思いに甘えさせていただきました。今回も、医系学部等事務部の中山部長を先頭に、医系総務課の永野間課長、大石補佐、永末係長、木山係長、佐渡島主任、島田さん、米光さん、谷口さん、医系財務課の石丸課長、安東補佐、豊福係長をはじめ多くの職員の皆様のお陰で完璧な運営がなされました。講演会の前、百年講堂内センチュリーカフェでの昼食の折に、馬出キャンパス内は全面禁煙になっているが学外では可能な場所があることを話しますと、「それが煙草はやめたんです」と中村先生は少し照れくさそうに言われました。

前年（平成29年）は「中村先生の話聞き若い世代が質問する」という形でしたが、今回の



写真9



写真10



写真11



写真12

「中村哲先生と九大医学部学生の講演会」は逆に「若い世代に中村先生が聞く」という形にしました。「今の学生が何を考え、どう行動しているか」を先生に知ってもらい、その上で対話ができればと考えたからです。この試みに意義を感じてもらったのか、赤司教授（九大病院長）を始め医学部教授会の多くの先生方も駆けつけてくれました。まず中村哲先生について私が長めの紹介をし、それに応える形で先生に短い講演をして頂きました。続いて、現役医学生である銚立君（医学科3年生）と野方君（医学科2年生）の発表です。野方君は、AIによる病理画像診断ソフトの開発に関わってきましたが、「私と医療と情報技術」と題して、ブロックチェーン技術を使った新しい医療情報システムの展望と自身の携わり方について話しました（写真9）。銚立君は、将来は「発展途上国の乳幼児死亡率の低下」に向けた取組みに関わりたいと考え、現在は多くの途上国の現場を見て回っています。今回は「僕の夢：日本の医療を世界へ」と題してその報告を行いました（写真10）。中村先生は、違うタイプの夢を描く二人にエールを送るとともに、野方君には「ITのシステムが行き渡っていないような国ではどのようにすれば良いのでしょうか？」と質問され、銚立君には「卒業後すぐに海外に行くかどうかは今決めてしまわないで、その時その時の事情で決めていけばいいんじゃないでしょうか。大切なのは今の気持ちを失わないことで、あとは自由に考えられたらいい。」とアドバイスされました（中村先生ご自身は、九大医学部卒業後のおよそ10年間、佐賀および筑後で、精神科、神経内科、脳外科とみっちり医者修行をして、それから岡山と英国で学んだ後ペシャワールに赴かれています）。また、野方君の発表には康教授（臨床検査医学）と二宮教授（衛生・公衆衛生学）、銚立君の発表には大賀教授（小児科学）と加藤教授（婦人科産科学）も討論に加わりました。最後に中村先生への質問コーナーを設けていましたが、ここでも会場から多くの質問が出ました（写真11）。海外での活動の難しさについて、中村先生は「言葉

や習慣の違いはあっても、弱い人に対する度量、これは伝わります。それから、現地の習慣を自分の価値観で裁かない、価値観と価値観の間で生まれる矛盾を自分達の論理で解決しない、ということが大切です。」と述べられました(写真12)。

午後3時までの予定だった「中村哲先生と九大医学部学生の講演会」は30分近くも超過した後、池田教授(法医学)の挨拶で閉会しました。その後は医学研究院の車に乗って頂き急ぎ伊都に移動しました。5時からの椎木講堂での中村先生の講演会(高等研究院主催)が控えていたからです。伊都での講演会が終わり、博多駅に向かう車の中で、先生が医学部学生だった頃のことを少しずつ話して下さいました。学園紛争まっただ中の時代です。九大医学部同級の久保先生(九大総長)とボランティアで大隅半島の病院に行った時の話もありました。博多駅ビルの上階の中華料理店で、中村先生に加え銚立君と野方君を招待して医学部執行部による夕食会を行いました。「アフガンの山岳地帯で過労のため倒れたとき中華料理で元気になった、と何かに書かれていましたので」と説明すると、にっこり頷かれたのを覚えています。大牟田へ帰る先生を新幹線の改札口で見送る時に、「またいつ

でも医学部で講演しますよ」と言われ、自宅住所をその場で加筆した名刺を下さいました。

12月11日の合同葬における長男・健さんの遺族代表挨拶は、共に凶弾に倒れたアフガニスタン人の運転手、警備の人への哀悼のことばから始まりました(お別れ会でもそうでした)。そして「父は『俺は行動しか信じない』と言っていました。父から学んだことは行動で示したいと思います。」と結ばれました。その行動とともに中村哲先生のことばは、小さくとも自分にできることをしっかりやらねばならない、人をそう鼓舞します。「時流から距離を置き、より良い世界を真剣に模索する心ある人々も、あらゆる分野にいる。」(中村哲『医者、用水路を拓く』3頁)、「科学や経済、医学や農業、あらゆる人の営みが、自然と人、人と人の和解を探る以外、我々が生き延びる道はないであろう。」(『天、ともに在り』246頁;医学部の講演会でもこの点を強調されました)。自然と人の和解、人と人の和解をどう成し遂げていくべきか、残された者が引き受けるべき重い課題です。

中村哲先生と同じ時代を生きた幸運に感謝しつつ、先生の御冥福を心よりお祈り申し上げます。



三人の講演者：中村哲先生(前列中央)、銚立君(前列右)、野方君(前列左)。
後列は左から、加藤教授、大賀教授、筆者、池田教授、康教授。

中村哲特別主幹教授を悼む

九州大学高等研究院長 副学長
佐々木 裕之(昭57卒)

中村哲先生の訃報が届いたのは、私がある学会を主催していた会期の真只中のことでした。驚き、悲しみに襲われると同時に、何故?という気持ちでいっぱいになりました。大学事務局からの報告とウェブのニュースを交互に睨みつつ、学会本部で短い追悼文を書き、大学のホームページに掲載してもらいました。

先生とは歳が離れていたのに特に親しかった訳ではありません。しかし、大学と中学(西南学院中学校)の先輩であり、こちらで勝手に尊敬し、憧れていました。先生は平成26年より九州大学高等研究院の特別主幹教授として教職員・学生・一般向けの講演を行っておられ、私は最後の数年間、高等研究院長としてそのお世話をさせていただきました。講演会の前後には、中

学で同じ英語の先生に習った話で盛り上がり、著書をいただいたりしました。

先生は暖かく、謙虚で、またそれだからこそ人の心を動かすことのできる方でした。アフガンでのご活躍は世界にあまねく知れ渡っておりますが、医学界でも「The Lancet」誌に追悼記事が掲載されるほど高く評価されています。しかし個人的に最も感動したのは「100の診療所よりひとつの水路」という先生のおことばです。医師という立場に安住することなく、新たな道に踏み出された想いや勇気が込められた「すごい」ことばだと思います。命を救うことに宗教の壁や国境はないことを改めて教えてくださいました先生、どうか安らかに眠りください。



「九州大学特別主幹教授就任記念 中村 哲 特別講演会」にて講演を行う中村特別主幹教授



講演会終了後の医学部学生との懇談会

